



# I章 はじめに

---

# 1

## ガイドライン作成の経緯と目的

### 1 ガイドライン作成の経緯

がん医療においては、病名や病状、治癒しないことなど患者にとって衝撃的な情報を伝え、患者の心理状態に配慮しつつ、治療の益と害と、患者の価値観を踏まえて最善の意思決定を行うという難しいコミュニケーションが必要となる。がん医療におけるコミュニケーションが重要であることは疑う余地がないが、コミュニケーションの多様性や明確な指針がないことから医学教育で扱われることは少なく、かつては先輩の言動を見て学ぶものとされてきた。しかし近年、がん医療のコミュニケーションについて臨床経験に基づく手引きが複数提唱され、卒後訓練としてコミュニケーション技術を学習するプログラムが開発されている。また、患者がどのようなコミュニケーションを好むかなどの調査研究、コミュニケーション法の介入研究なども行われるようになった。

がん診療に携わるすべての医療者が適切な患者-医療者間コミュニケーションを行えることは重要である。一方、近年の医学の進歩は著しく、がん医療におけるコミュニケーションについても日々新しい知見が生み出されている。しかしそのような新しい知見は膨大にあり、医療者が常に自ら学習したとしても、個人がすべての新しい知見に精通することは、現実的には不可能である。そのため診療ガイドラインが、最新のエビデンスを日常臨床で円滑に活用できるようにするために導入されてきた。そこで日本サイコオンコロジー学会（Japan Psycho-Oncology Society：JPOS）と日本がんサポーターシップケア学会（Japanese Association of Supportive Care in Cancer：JASCC）は、すべての医療者ががん患者に対してエビデンスに基づく適切なコミュニケーションを行えるための一助として、精神心理的問題に関する診療ガイドラインの作成に取り組んでいる。

日本サイコオンコロジー学会は、がんに関連した心理・社会・行動的側面について科学的な研究と実践を行い、がん患者と家族により良いケアを提供していくことを目指している学会である。サイコオンコロジー（Psycho-Oncology）とは、サイコロジー（Psychology：心理学）やサイカイアトリー（Psychiatry：精神医学）という言葉の「サイコ」と、オンコロジー（Oncology：腫瘍学）という言葉からの造語で、「精神腫瘍学」と翻訳されている。日本サイコオンコロジー学会は1987年に創設され、今日までがん医療における心理社会的ケアについて、その専門家を中心にさまざまな情報発信を行ってきた。

日本がんサポーターシップケア学会は、がん医療における包括的な支持療法を教育、研究、診療を通して確立し、国民の福祉に寄与することを基本理念とする学会である。

日本がんサポーターケア学会では、さまざまな支持療法に関する最新の知見を収集し、現時点における最も適切な診療指針を発信していくことを重要な役割の一つとして位置づけている。

日本サイコオンコロジー学会と日本がんサポーターケア学会では、互いに密接に連携し、がん患者の心理社会的支援に関する適切な診療指針を作成し公表するなどの活動を通して、わが国のがん医療に良質な「こころのケア」の均てん化を目指している。

診療ガイドラインの作成において最も大切なことは信頼性である。その信頼性を確保するためには、個人の恣意的な考えのみで記載されるのではなく、エビデンスに基づいて科学的な判断がなされること、そして作成プロセスそのものに普遍性と透明性が担保されていることが重要である。この信頼性を確保するために、日本サイコオンコロジー学会と日本がんサポーターケア学会では、Mindsによる「診療ガイドライン作成マニュアル」に則ってガイドラインを作成することとした。なお、Mindsによる診療ガイドラインの定義は「診療上の重要度の高い医療行為について、エビデンスのシステマティックレビューとその総体評価、益と害のバランスなどを考慮して、患者と医療者の意思決定を支援するために最適と考えられる推奨を提示する文書」となっている。日本サイコオンコロジー学会と日本がんサポーターケア学会による診療ガイドラインでは、包括的な文献検索を行い、なるべく最新の知見を集積し、それに基づいて推奨を記載するよう心がけている。しかしがん患者のコミュニケーションに関するエビデンスは必ずしも多くなく、現状ではメタアナリシスなどの統計学的検討が困難である臨床疑問が多くあるのも事実である。そこでさまざまな職種によって委員会を構成し、委員会としてのコンセンサスによって記述する方法も採用した。

## 2 ガイドラインの目的

コミュニケーション技術について質の高い比較試験を行うことは難しく、臨床疑問に答えるエビデンスが限られることが予想されたが、臨床的に重要な課題についてはエビデンスが限られていても、観察研究や心理実験などの知見やエキスパートオピニオンを参照して可能な限り推奨を作ることを目指した。

本ガイドラインの目的は、がん医療に携わる医療者を広く対象として、がん医療におけるコミュニケーションについて、その最新の知見を総括したうえで、評価と標準的対応について示すことである。

(秋月伸哉)